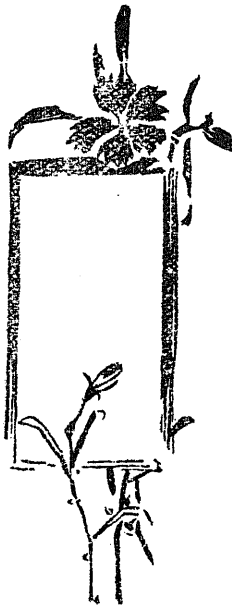


市川君に 東 生

本誌前號に於て、拙著幼稚園保育法の分明ならぬ所を懇々示指せられたる君の厚志に向つて深く感謝す、此號に於て、僕聊かその辯すべき所を辯じ、以て、君の厚意に酬ひなんかと思惟せし所、雜誌編纂の上より遂に事愈と違うて、次回にするの已むを得ざる事となりぬ、乞ふ諒せられんことを



雜 報

●女子高等師範學校 ▲夏期休暇 本科専修科とも既に本月二日を以て終業式舉行、附屬校園とも来る十一日より、愈夏期休暇となるべし。 ▲戦時講話 毎週土曜日午後、地理、外國歴史擔任教授の戦時講話は、例の如く開催されしが、先月第一土曜日には、特に、石黒男爵の本邦赤十字事業の發達に關する講話ありて、最も深き感動と興味とを與へられたり。 ▲演習會 附屬高等女學校第七回演習會は、さる月十八日、體操場に開催されぬ、参考のため、プログラムを左に

開 會 午前八時

唱歌(みが、すば) 一同合唱

第一期讀 一年生  
第二期讀 二年生

|      |           |              |
|------|-----------|--------------|
| 第三   | 説話        | 乙三年生         |
| 第四   | ピアノ獨奏     | 四年生          |
| 第五   | 合唱 月みれば   | 甲三年生         |
| 第六   | 對話        | 四年生          |
| 第七   | 合唱 夢      | 五年生          |
| 第八   | 英語對話      | 專攻科一年生       |
| 第九   | 獨唱 このみ山   | 專攻科二年生       |
| 第十   | ピアノ獨奏     | 專攻科二年生       |
| 第十一  | 説話        | 專攻科三年生       |
| 第十二  | 合唱 日本海軍   | 凡そ十分間<br>一年生 |
| 第十三  | 説話        | 二年生          |
| 第十四  | 英語對話      | 乙三年生         |
| 第十五  | 説話        | 甲三年生         |
| 第十六  | ピアノ獨奏     | 專攻科二年生       |
| 第十七  | 對話        | 四年生          |
| 第十八  | 對話        | 五年生          |
| 第十九  | 英語朗讀      | 專攻科二年生       |
| 第二十  | 合唱 舊友舊時   | 專攻科一年生       |
| 第二十一 | 説話        | 專攻科三年生       |
| 第二十二 | 唱歌(たのしわれ) | 一同合唱         |

大日本女子教育會 下田氏の主幹たる全會の第

閉會 正午

二回講演は前月十九日、帝國教育會内に於て、元  
 良博士の心理上錯覺と美感との關係、吉田靜致氏  
 の女子の獨立心の講談ありたり。

●大塚音楽會 東京高等師範學校學生の間に  
 なる同會は、先月二十五日小石川大塚の同校講堂  
 にて第二回演奏會を開會せり。一時半頃よりは  
 續々聴衆の來校するありて、定刻には、さしほに  
 廣き講堂も内外の紳士淑女學生等にて滿ち渡りぬ  
 さて、當日のプログラムは左の如し

- 第一部
- 一、唱歌 斥候、戰場の跡 聲樂部會員
  - 二、ピアノ連奏 〔坂野覺〕 小林庸吉
  - 三、獨唱 マルサ 神保格
  - 四、ヴァイオリン獨奏 デーシー 今堀友市
  - ホプリー

五、ピアノ連奏

デヴルス　マーチ

〔村山〕 沼次郎

六、唱歌

英國國歌

聲樂部會員

第二部

七、唱歌

座瀨中佐、騎兵の襲撃

聲樂部會員

八、ピアノ獨奏

ウヰリアム、テル

神保格

九、尺八

鹿の遠音

上原 六四郎氏 (來賓)

十、ヴァイオリン及ピアノ

みだれ(華曲)

〔今堀友〕 保 格 市

十一、ピアノ獨奏

アール キング

スウキフト教授夫人 (來賓)

十二、合奏(ピアノ、オルガン及ヴァイオリン)

メデイテーション

器樂部會員

十三、合唱

君が代

一 同

何がさて、一始めてから尙日が淺き故と幹事の某學生が申されたれど、夫にしては見事の出來と申

すの他なく、殊に神保君のピアノは一段の喝采を博したりしか如し、プログラム中、來賓上原氏は都合によりて止め、代はりに他の人の六段曲吹奏あり、來賓、スウキフト教授夫人のピアノ獨奏エルケーニツヒは、有名なるゲーテの詩に、シューベルトの曲を附したるもの、詩の意味十分に顯はれてさすが本場所丈けに違つたものなりと思はせたり序に、日本國歌君が代と、英國々歌、米國々歌を同唱せしは、甚だよかりしも、日本國歌を合唱する時には、黃米の貴婦人までも悉皆起立させながら、彼國の國歌を歌ふ時は、何も言はずに、皆一同腰かけた儘で聞かせ居るなどは、折角來會せる外國人に對して面白からず覺えたり、如柯のものにや

さて、かゝる會は、昔し第一高等學校に在りし由

なるも今は、立ち消えの様なり、此會丈けは是非  
將來に發達させたまものなり、寄宿舎生活をして  
趣味あらしむる上にも、はた、生徒の嗜好を高尙  
ならしむる上より見ても、

序に、職員は餘り關係せざる由にて、何も悉皆學  
生の手に成る由、唱歌も、樂曲も、皆此會にて、  
選したるものなりといふ、騎兵襲撃の唱歌を左に

### 騎兵の襲撃

神保格作歌

一、萬馬地を蹴りて 飛ぶが如く

千里雲湧きて 空に漂ふ

敵の矢丸霰と 注がばそそげ

我が太刀はよしや 碎けば碎け

我等が駿馬には日本の男兒乗れり

二、進め、我が男兒、太刀かざして

襲へ、彼の敵を 彼何者ぞ

ゆく手遮ざる者は 我が蹄かけて

唯一撃の下に 蹴散らし果てむ

日本魂向ふところ 敵地なし

### 新刊紹介

▲言文、日本唱歌 全四冊 小島政吉校閲  
近森出來治作曲

實際に悉く子供にやらして見ないから分らぬが、  
材料の排列の至極當を得てること、歌詞が言文一  
致に出來て居る爲めに、尋常小學校、幼稚園の唱  
歌には最も適當して居ること、且つ、樂曲が、平  
易に出來て居て、これ亦、幼稚な生徒の嗜好によ  
くわてはまることは、蓋し疑ひなからう、著者は  
師範學校教諭として、斯道に十分經驗のある人で  
ある(定價各冊八錢)(東京神田裏神保町光風館發

行)

▲鹿兒島藩の風教一名健兒の教育。

野島藤太郎君著

著者は現に、鹿兒島縣師範學校長たり、序に曰く  
吾邦目下の急務は國民の剛健なる性格を陶冶する  
に在り、予是に見る所あり、鹿兒島に於ける武士  
教育法を探究して大に國民教育に資せんと欲し、  
或は父老に聞き、或は事實を蒐集し、後日の備忘  
に供せり、然るに世間魔城風教の實を得て國民教  
育に資せんと欲するもの亦少からざるを信じ、之  
を世に公にす云々と、蓋し、過去に於て、現時に  
於て、幾多の名士を我國に提供したる魔城の教育  
の真相は、之に依りて始めて明にするを得べく、  
人を教育する任にある者、自ら修練せんとする者  
之に因りて得る所多からん(一冊二十五錢郵稅四

錢 下谷車坂町三一、元々堂發行)

▲男女の研究 全一冊

大鳥居奔三 共著  
澤田順次郎

著者の一人は中學校、一人は師範學校の教諭で、  
其上、坪井正五郎博士、遠藤宮崎縣師範學校長の  
序文あり、之丈で既に、此書物が、從來ありふ  
れた、造化機論一流の書物でないことが知れるべ  
し。評者は、未だ十分精讀せざるが故に、茲には  
詳細なる批評と紹介とをなす事を得ざれども、男  
と女とを各方面より研究して、遺憾なからしめ  
たるが如し、従つて年少き未婚の青年、少女には  
讀ませたくなき個所もあり、且つ、少しく望む所  
をいは、今少しく實際生活上に關係させて記述  
する所ありたらばと思ふ節もなきにあらねど、大  
體よりいつて、極めて有益の著述なりといふべし  
(定價五十錢 神田裏神保町六、光風館發行)

▲あはれみ

動物虐待防止會の趣旨を世に弘め又會の狀況を報告する爲のものです、讀みよい可愛らしい廉價な(一部金二錢)小雜誌である。同會の目的は已に世人の知らるゝごとく、博愛の心を養ひ人道をおしひるめる爲に動物をいぢめる事を防ぐのにあるので「わはれみの趣意も之で悉して居ます、何卒直接に牛馬其外の畜類を取扱ふ職分の人々は勿論一般の親御達小供衆が此「あはれみ」を讀んで虫けらに至る迄凡て動物をいたはるといふ人間の重き道を自ら履み行く様に又不心得の人には之を讀ませて心を改めさせる様に願ひます」と其第一號に發行の趣意を述べて居られるが、吾人はかゝる良き雜誌が新しく生れ出でし事を喜び其前途を祝すると共に、世人特に直接に子供の教育に當つて居らる

方々に之が熟讀を勧め大人が先づ此會の精神の在る處を辨へて以て小さい人達にも幼より人道を實踐せしめられん事を切望する。(神田區南甲賀町八番地 動物虐待防止會發行)

▲中等夜學校睦友會報 第二號 神田區永富町六番地中等夜學校睦友會發行

書問勉學の邊なき日勤の子弟をして夜間、高等普通學の全般を履修せしめんとする中等夜學校の學生の同窓會報なり、校長江原素六君の講話其他會員の論說等あり

▲軍國の少年

神田區小川町一、開發社發行

▲軍國の女子

名前で以て、凡そ中味が想像されましよう、二とも目の覺め相な奇麗な表紙で、奇麗な口繪と、滿洲の地圖が附いて居る。少年少女に日露戰爭の由

來戰時と戦後との心得を知らせるが目的である、  
時節柄、愛讀せられるに違ない(定價一冊十二錢)

▲心の花 竹柏會主 佐々木信綱大人の主幹た

る心の花雑誌は、本月其八巻四號を出された。逐  
號嶄新の材料に富み、細くに従ひ、自ら清爽を覺  
える(一冊十二錢郵税一錢 日本橋區本石町一

竹柏會出版部) ▲女子の友 東洋社より出で居た  
る雑誌女子の友は、今回更に交友社(牛込市ケ谷

田町二ノ三〇)より出づる事となりたり、本誌一  
五三號社説に革新の辭あり、但し、大方は今迄通

り誌友の寄書の金玉の文字なり、革新の序に口繪  
誌友小照も廢して如何と思ふ ▲家庭新聞 熊本市

から發行する本新聞の家庭の讀料として極めて適  
當なことは何時か紹介したり、近來は更に、日露

戦争記の附録を添えたり、定價一部三錢 月三回

の發行なり ▲すみれ、可愛らしい文學雜誌で、讀  
んで清酒たる文字多し、發行所は甲府市、

會 報

明治三十七年六月十一日午後一時半より女子高  
等師範學校附屬幼稚園に於て第三十三常會を開く  
當日は以前の常會と趣を異にし特別の演説者なく  
會員田中ふみ、野口ゆか氏の幼稚園保育につきて  
の實驗談、下田たづ氏の感すべき某良家庭につき  
ての談話等あり而して此間會員互に右に付きての  
所感及意見を述べ尙隨意談話中茶菓の響應及唱  
歌等あり。當日は出席者僅に四十名に過ぎざりし  
も互に胸襟を開きて語り合ひ有益に過したり閉會  
五時

當日區組合よりの報告順番は日本橋區なりしも

報告の事項なきため見合せたり尙組合に多少の變  
 動あり各組合の委員も定りたり左の如し

- 1 日本橋區 委員佐藤むめ、橋本はな
- 2 神田區 全 (未定)
- 3 麹町區 全 野口ゆか、山下つや
- 4 四谷區 全 小貝てい、守瀬淺茅、吉澤
- 5 牛込區 河合ちよ
- 6 芝區 堀 てつ
- 7 本郷區 全 田中ふさ
- 京橋區
- 赤坂區
- 下谷區 全 下田たつ
- 淺草區 和田くら
- 本所區 大山千代
- 深川區

附右の變動は京橋が芝、麻布、赤坂に下谷、淺草、京橋、本所  
 深川が本郷に合併したる結果なり

- 小石川區竹早町女子師範學校 小 原 藤 枝
- 京橋區新富町四丁目六 右紹介小谷野千代 西村きしえ

右事務所申込

- 本所區中ノ郷瓦町一東橋小學校附屬幼稚園 久米 たつ
- 右紹介和田くら
- 熊本縣飽託郡大江村七七一 脇山 まさ
- 日本橋區箱崎町三丁目 右紹介中村五六 傍島 たま
- 赤坂區仲ノ町二十 右紹介中村五六
- 女子高等師範學校 佐藤 さた
- 同 右紹介淺岡はま
- 同 土方 ひさ
- 同 山下 ふさ
- 同 渡邊 のぶ
- 同 酒井 たね
- 同 牧あさを
- 同 鈴木 ざん
- 同 田副 つる
- 同 藤 井 豊
- 北豊島郡大泉村大字上土支田六三四加藤彌次右衛門方 右紹介岩田ゆき
- 京橋區木挽町九ノ三二吉田方 大川 なみ
- 赤坂區青山權田原町四一 湯本 ゆき
- 右紹介小谷野千代 中安 親子
- 右紹介武井綱枝



轉 居

|                   |     |    |
|-------------------|-----|----|
| 東京府女子師範學校         | 足立  | たか |
| 新潟縣高田高等女學校        | 高山  | ふみ |
| 横濱市南太田町一七五五       | 村田  | よね |
| 静岡縣静岡市高等女學校       | 安野  | みち |
| 臺灣基隆築港局官舎         | 川上  | 光子 |
| 佐賀縣師範學校           | 野原  | つね |
| 札幌區北一條西十二丁目一ノ三號官舎 | 高島  | 長江 |
| 淺草區向柳原幼稚園         | 福井  | 榮  |
| 麹町區中六番町四十六        | 鈴木  | たけ |
| 本郷區西片町一〇ホノ十號小林武彦方 | 永田  | か  |
| 新潟市白山浦一ノ五十九森田弘道方  | 原   | さ  |
| 東京下谷區中根岸五十四       | 御園生 | よ  |
| 小石川區大塚窪町五         | 吉田  | 幸  |
| 日本橋區箱崎町一ノ一        | 傍島  | た  |
| 麹町區一番町三十四         | 大賀  | ふく |
| 廣島縣立廣島女學校         | 岡部  | 子  |
| 東京麹町區元園町二丁目九      | 松山  | 鑑  |

會費領收 自明治廿七年五月二十九日 至全 年六月二十九日

|     |      |      |
|-----|------|------|
| 金額  | 年月日  | 姓名   |
| 一〇〇 | 三七、四 | 山田マス |
| 一四〇 | 三六、三 | 吉良ハヤ |
| 一一〇 | 三七、一 | 杉本園  |

|     |      |       |
|-----|------|-------|
| 三〇  | 三七、五 | 山本いさみ |
| 一一〇 | 三六、七 | 大江きま  |
| 三〇  | 三七、三 | 大森くに  |
| 一〇〇 | 三七、六 | 四川肇   |
| 一二〇 | 三七、四 | 關谷い   |
| 一〇〇 | 三六、九 | 遠藤長江  |
| 五〇  | 三七、六 | 脇山まさ  |
| 五〇  | 三七、四 | 坂元つや  |
| 一〇〇 | 三七、一 | 佐々木はる |
| 一〇〇 | 三七、一 | 小泉千代  |
| 六〇  | 三七、一 | 吉田はる  |
| 七〇  | 三七、一 | 岡田うめ  |
| 六〇  | 三七、八 | 木村寅   |
| 二〇  | 三七、一 | 甲斐直枝  |
| 二〇  | 三七、一 | 原さう   |
| 一〇〇 | 三七、八 | 野村ぎん  |
| 一〇〇 | 三七、四 | 北野晴   |
| 五〇  | 三七、三 | 池邊千東  |
| 七〇  | 三七、六 | 岸邊福雄  |
| 三〇  | 三七、七 | 淺岡はま  |
| 三〇  | 三七、六 | 佐藤さだ  |
| 四〇  | 三七、七 | 山崎いよ  |
| 三〇  | 三七、五 | 小西壽美  |
| 二〇  | 三七、五 | 大山千代  |

|     |            |
|-----|------------|
| 一〇〇 | 三七、六—三七、一〇 |
| 一〇〇 | 三七、六—三七、八  |
| 三〇  | 三七、八—三八、七  |
| 一三〇 | 三七、五—三七、九  |
| 五〇  | 三六、七—三七、六  |
| 一二〇 | 三七、三—三八、二  |
| 一三〇 | 三七、七—三七、一二 |
| 六〇  | 三七、六       |
| 一〇  | 三七、六       |
| 一〇  | 三七、六       |
| 一〇  | 三七、五       |
| 一〇  | 三七、五       |
| 一〇  | 三七、五       |
| 一〇  | 三七、五       |
| 一〇  | 三七、五       |
| 一〇  | 三七、六       |
| 一〇  | 三七、六       |
| 一〇〇 | 三七、三—三七、一二 |
| 一〇〇 | 三七、四—三八、一  |
| 五〇  | 三七、二—三七、六  |
| 一二〇 | 三六、二—三七、一  |
| 五〇  | 三七、七—三七、一一 |
| 一二〇 | 三七、一—三七、一二 |
| 一〇〇 | 三七、八—三八、五  |
| 一二〇 | 三七、七—三八、六  |

|       |   |
|-------|---|
| 山中下枝  | 山 |
| 青田しう  | 青 |
| 清水寛二郎 | 清 |
| 久米たつ  | 久 |
| 永井まん  | 永 |
| 本多しま  | 本 |
| 太田とめ  | 太 |
| 益田一枝  | 益 |
| 藤谷いわ  | 藤 |
| 内田たね  | 内 |
| 三輪もと  | 三 |
| 高松幾代  | 高 |
| 齋藤のぶ  | 齋 |
| 井村重代  | 井 |
| 岩田ゆき  | 岩 |
| 中安親子  | 中 |
| 宮地ますほ | 宮 |
| 若林みつ  | 若 |
| 吉田金次郎 | 吉 |
| 日比格   | 日 |
| 松浦かめよ | 松 |
| 澤村きみえ | 澤 |
| 平野みよ  | 平 |
| 楠本勝一  | 楠 |

|    |           |      |
|----|-----------|------|
| 二〇 | 三七、五—三七、六 | 田中ふみ |
| 二〇 | 三七、五—三七、六 | 下田鶴  |
| 二〇 | 三七、五—三七、六 | 雨森劍  |
| 二〇 | 三七、五—三七、六 | 田邊春  |
| 二〇 | 三七、五—三七、六 | 武井綱枝 |

本誌第五號に掲載すべかりし會費領收の中編輯の都合に由り省略せし分數名之あり次號に掲載致すべく候。

會費は東京御在住の方には近々集金人差し向け申すべきに付き御渡し下され度く候地方の方に未納の向は至急本會あてにて小爲替を以て御拂込み下され度く候

七月

フレール會幹事